

南海の海に三十八時間漂流して

福井県 高橋 勇

私は、父が早く亡くなりましたので、早くより母と二人暮らしで、出征するまでは印刷所に勤めていました。大正十二（一九二三）年八月六日生まれで、昭和十三（一九三八）年三月二十六日、高等小学校の高等科を卒業しました。卒業後は町内の東小路大西印刷所に勤務しておりました。

昭和十六年六月三日、徴用令の白紙召集で、舞鶴海軍軍需部第一課火薬庫に入部しました。昭和十七年一月、横須賀軍需部に転勤し、昭和十七年二月にはトラック島夏島に在る第四軍需部に転勤を命ぜられ、汽船「第二東洋丸」に乗船して、サイパン、テニアン、パラオ本島を経由してニューブリテン島のラバウルに在った第八軍需部燃料班の勤務についたのが、昭和十七年四月上旬のことでした。

昭和十七年六月五日、ミッドウェー海戦で日本海軍が全滅し、それ以後、制海、制空権は米軍に握られ、各地で日本軍の玉砕が始まるのですが、我々下級軍属は、そんなことは全く知らずに上級者の命令に従って任務に励んでいました。

昭和十七年十一月になると駆逐艦に乗れと命ぜられ、ドラム缶を消毒して白米を詰めて、駆逐艦に積み込む作業を命ぜられました。何のためかと思うまでもなく深夜、全速力でラバウルから南へ向け発進しました。月も出ない闇の海上を向かったのはなんとガダルカナルの沖合でした。できるだけ海岸に接近してドラム缶を海中に落して反転、全速でラバウルまで帰る作業でした。

この方法も、米軍が発見することとなり、米軍は発見次第、機銃掃射でドラム缶を沈めるので、次には竹筒に米を詰めてからドラム缶に入れる方法に変換して、またガダルカナルの海岸に出かけました。

そうこうしているうちに徴兵適齢期を迎えたた

め内地に帰還し、昭和十八年五月上旬、徴兵検査を受けるため門司に上陸しました。途中、パラオ島とアンガウル島（燐鉱石の産出で有名）に寄り、国防婦人会の人達の歓待をいただきました。それから横須賀にある軍需部に出頭し徴用解除となりました。

昭和十八年五月下旬、今立町栗田部にて徴兵検査を受け見事甲種合格となりました。九月頃、入営通知がきました。それには「昭和十九年四月十日午前九時、岐阜中部第四部隊に入隊すべし」との現役兵通知書が来ました。中部第四部隊の中には歩兵第三百三十六連隊（小川大佐）と歩兵第六十八連隊の留守部隊が駐屯しており、私等現役入隊者は歩兵第六十八連隊要員として入ったのです。

本隊は中国にあつて、我々の初年兵教育は歩兵第三百三十六連隊の幹部がやってくれました。四月中旬、歩兵第三百三十六連隊に動員令が下りました。行く先は南洋諸島サイパン島でした。静岡、名古屋、岐阜の各連隊には各地から赤紙召集動員の兵

隊が集まり、岐阜の歩兵第三百三十六連隊は約千八百人にふくれ上がりました。私達初年兵は一時、岐阜の全華国民学校へ移動させられました。歩兵第三百三十六連隊は四月十九日、サイパン島に到着、六月十六日、玉砕しました。

昭和十九年六月上旬、私達初年兵は静岡の中部第三部隊へ転属命令が下り、部隊編成のため各地から召集兵が集まりました。六月下旬の夜中、静岡駅を出発、門司港到着、各地から続々と他の部隊も到着して門司の街は兵隊で埋まりました。どこへ行くのか分からずに、二十六日には乗船を開始しました。

私達が乗ったのは「香椎丸」という約七、〇〇〇トンの輸送船で、煙突に「一二」と書いてありました。「二番船」という訳です。私達の部隊の先発隊は「七番船」の「日蘭丸」（七、〇〇〇トン）に乗っていました。この輸送船団は十二隻からなる大輸送船団でした。二十七日門司港を出て豊後水道を通って一路南へ向かいました。

船団会議で「兵に告ぐ」で、我々は第十四軍司令部（在マニラ）要員として派遣された、と発表されました。本間雅晴中将が司令官でした。

七月十二日朝七時頃、「日蘭丸」が米潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没しました。私達が乗った「香椎丸」は事前の打合せで第一救助船になっているので直ちに救助に向かいました。幸い比島リングアエンの沿岸であったので救助作業も順調に進み、大多数の兵員が救助されました。七月十四日、私達はようやくマニラ港に上陸、小学校に泊り、埠頭衛兵に立ちました。八月十三日まで、マニラ市に駐屯しました。

昭和十九年八月十四日、マニラ港出航。「メキシコ丸」（七、〇〇〇トン）に乗船、乗員四千人、レイテ島にて水補給、サンボアングに寄港、ホロ島寄港、駆潜艇と海防艦、それぞれ一隻の護衛のもと転属先のセレベス島メナドを目指して南下いたしました。

八月二十九日午前一時頃、私は船倉の狭い居住

ドスンと右肩をマストに打ちつけられ、火柱を避けて後部に退りましたが、トラックが右に左に傾いていてなかなか船尾まで行かれませんでした。魚雷の当たった船倉からは兵隊たちの「助けてくれ！ 助けてくれ！」の絶叫が聞こえました。手の下しようがありませんでした。現在でもあの絶叫は、耳の底に残っています。その頃になって退船命令のラッパが鳴り、汽船の汽笛が「ポー、ポー」と鳴り出しました。修羅場とはこういう状態を言うのでしょうか。そのうち船首から沈み始めましたので、私は六メートルぐらいの高さの船尾から海に飛び込みました。

軍属時代に輸送船であちこち行っていましたので、他の人よりは海に馴れていました。とにかく沈船から少しでも離れないと沈没の際の波に引きずり込まれるので必死になって泳ぎました。

船から洩れた重油に火がついて闇夜の海を照らします。必死に離れるため泳いで振り返ると闇夜の海に炎に包まれた輸送船は、すぐそばに見えた

区の暑苦しさに耐えかねて、戦友二人に声を掛けて甲板へ昇ろうと誘いましたが「もうすぐに港に着くだろうから……」と言ったので、私の水筒を戦友に渡して「よかったらこの水を飲めよ」と言って縄梯子で上甲板に登ってゆきました。禪一丁の裸でした。甲板に登って潮風に当り、ほっと一息して辺りを見回すと、古年兵や下士官がいつぱいで、新兵が腰下ろすような場所がありません。仕方なくマストの根元に空いてる場所を見つけて腰を下しました。

周りには機関銃がずらりと並べてあり、トラックがロープにつながれて何台も有りました。突然。頭上から見張り兵の「雷跡発見！」と絶叫が聞こえました。一発目は回避できましたが二発目の魚雷が一番倉と二番倉の中間に当たりました。一番船倉にはガソリンのドラム缶千本、二番倉には弾薬が満載してありました。

物凄い火柱と轟音で、甲板にいた下士官や古年兵は全員吹き飛ばされて海中に沈みました。私は

ので、火の海から逃れるべく必死で泳ぎました。船首から沈みはじめた時、船首には船員の居住区の丸窓が有ります。その丸窓から船員さんが首を出して「助けてくれー！」と叫んでいましたが、肩が窓から出られず、そのまま波に吞まれてしまいました。重油の炎から、やっと逃れて船の方を見やると、舷測に吊られた救命ボートには将校が集まって「早く降ろせ」と叫んでいました。船員がジャックナイフでロープを切断しましたが、二本一緒に切るところを、一本だけ切ったものから、逆さまになって海に落ちるのを見ました。

それから後に戦友会での話ですが、海に飛び込んだ兵の中には火傷を負った者がたくさんいて、ボートに乗せてくれと頼んだそうですが、乗っていたのは将校ばかりで、軍刀を振り回してボートに乗ることを拒絶したため、怒った兵隊達がボートを引っくり返したそうです。損害が多かったのは私達の部隊で、三、四番艦の広島編成の部隊は大部分が救われたそうです。

海上は月が沈んで真暗闇、燃える輸送船も沈むまでは海を照らして、生きている兵隊は群れを作って泳いでいましたが、船も沈んで真暗闇になりました。禰一丁で飛び込んだ私は、生来泳ぎは得意だったので助かりました。取あえず救命具をと、死んで浮いてる者が着けていた救命具を三個着けて救助を待ちましたが、船団の護衛に当たっていた海防艦が魚雷で火柱あげて轟沈され、一人の生存者も無しとなり、頼むは駆潜艇一隻となってしまいました。

惨劇の夜が明けて八月三十日になりましたが、救助船は来ません。生存者も、時が経つにつれ一人沈み二人沈みで心細くなってきましたが、遂に駆潜艇が回って来ました。そのうち友軍の水上機も着水して駆潜艇と手旗信号を交わしていました。それに元気づけられ、必ず助けに来てくれるからと信じていました。しかしノドが乾いてきました。が海水は飲めませんので我慢するしかありません。汚い話ですが海の中で小便するとポーと下腹部

二人のうち二人だけが助かりました。

そして私等助かった者は、兵站病院で診察を受け療養所に収容されたのですが、その夜、兵站病院は空襲のため焼けてしまい、私達は再び生命拾いをしたのです。療養所にいる間に全身の皮膚がボロボロにめくれ、一週間で全身の皮膚が新品になりました。奉公袋の中に有った写真は海水のため変色し、かすかに判読できますが六十年後の現在も健在です。

私達はその後、編成替えをして第二軍第五十七独立混成旅団(桂)遠藤新一少尉(陸大第四十期、功三)の独立歩兵第三百七十五大隊(岩本貢少佐)に転属となりました。所在はセレベス島メナドでした。

後日談になりますが、「メキシコ丸」の艦長はマニラ出航の前に船舶司令部に対し糧秣、弾薬はよろしいがガソリンだけは積まないでくれと頼んだのだそうですが、軍の命令だから駄目だと断られたとのことでした。

が温かくなり、元氣を取り戻した記憶が残っていません。海に漬かっているうちに持病が治った兵もいました。

私は海に飛び込むとき首に奉公袋をブラ下げており中に貴重品と出征時の家族と一緒に撮った写真も入っていました。海に浸ること実に三十八時間間でやっと駆潜艇が来てくれました。船から垂らしてくれたロープにすがりついて甲板に引き上げられた時の喜びは一生忘れられません。

最後に引き上げられた者はわずかに五人でした。水兵さんが握り飯一個とコップにお茶を持ってきてくれました。そのおいしかったことは生涯忘れられません。

助けられた時に水兵さんが海に向かって拳銃をパンパンと射っているので何んだらうと聞いたら、なんと鮫がたくさんいるではありませんか。よく食われなかったものだとゾッとしました。

八月三十一日朝。セレベス島のメナドの海岸に上陸して人員点呼がありました。私の分隊は十
昭和二十年八月十五日頃、米軍機が撒いたビラを兵隊が拾ってきて、日本が敗けたようだとの話を上官が聞いて、黙っていると注意しました。十九日集合命令がかかり終戦が告げられました。

北セレベスのヒートン地区のオランダ軍の収容所に約七千人が収容されました。昭和二十一年五月五日、内地復員のためメナド港に集結し、米船「V088号」に乗船し、モロタイ島とハルマヘラのオランダ軍司令部に寄り、浦賀への帰国の指図を受けました。しかし途中、和歌山県田辺港に入れとの指図を受け、昭和二十一年五月十八日、田辺港に入港上陸しました。早速、留守宅へ電報を打ち帰国を知らせました。

そして五月二十一日、懐かしの故郷、鯖江に帰り、ようやく母に会い安心しました。